# 武庫川臨床教育学会 ニュースレター



# 第 17 回武庫川臨床教育学会研究大会のご案内(第 2 次)

本年度研究大会を2023年3月に開催いたします。積極的な研究発表とご参加をお願いします。

3年前からコロナ禍に見舞われ、私たちの日常生活は大きな変化が生じました。こうした変化は、それぞれの実践の場でどのような課題をもたらしたのか、それは援助者に確かに認識されているのか、昨年の第 16 回大会ではみなさんとともに考えあいました。17 回大会は「臨床教育学のこれまで、これから」(仮題)をテーマに、参加者のみなさんと今一度「臨床教育学」について確かめあいたいと思います。シンポジウムでは、テーマに沿ってそれぞれの登壇者から臨床教育学のイメージを報告していただき、全体講演においてはルポライターの丸山美和さんから「ウクライナ侵攻、ポーランドから見えてくること」(仮題)として、現地の様子を含めてお話していただく予定です。皆様お誘いあわせの上、ぜひご参加いただきますよう、お願いいたします。

#### ◆ 日時·会場

2023年3月4日(土) 10:00~17:00 (受付 9:30~)

## 武庫川女子大学教育研究所 (対面とオンラインによるハイブリッド開催)

会場での開催を基本としながらも、オンライン(zoom)による報告・参加も可能といたします。なお、新型コロナウイルスの感染拡大が懸念される場合は、オンラインのみでの開催に変更することもあります。2月 12日(日)にホームページで最終決定をお知らせします。

#### ◆ 日程

9:	30 10:	00 12:	:00 12:	:45 13:3	30 15	:00 17	7:00
	受付	自由研究発表	休憩	総会	シンポジウム	全体講演	

#### 武庫川臨床教育学会

http://mukogawarinkyo.com/

〒663-8558 兵庫県西宮市池開町 6-46

武庫川女子大学教育研究所内

電話番号:075-922-7749(吉益自宅)

メール: mukogawarinkyo@yahoo.co.jp

#### ◆ 参加費

会員、準会員、武庫川女子大学の学生・院生は無料。非会員は1000円。

※ 非会員の方は、参加費をゆうちょ銀行の振替口座(口座番号:00940-3-224555、加入者名:武庫川臨 床教育学会)に参加申込〆切日までにご送金ください。その際、備考欄に「大会参加費」と記入してください。

## ◆ シンポジウム・全体講演

# シンポジウム「臨床教育学と私」

武庫川の大学院に入学した動機、そこで学んだこと、そこから生まれた今の問題意識について3人の方に自由に語っていただき、会場の方との交流も踏まえ、臨床教育学を通して感じ考えていることを浮かび上がらせます。

問題提起:小谷 正登さん(関西学院大学)、岩崎 久志さん(流通科学大学)、

田﨑 由子さん (大阪綴方の会)

司 会: 木田 重果さん (『臨床教育学論集』編集委員長)

## 全体講演「ウクライナ侵攻、ポーランドから見えてくるもの」(仮題)

講 師:丸山 美和さん(ルポライター、ポーランド・クラクフ在住)

### ◆ 自由研究発表の申込

- ① 発表時間は20分、質疑応答15分を予定しています。発表申込の〆切は2023年1月31日(月)です。 E-mail: mukogawarinkyo@yahoo.co.jp よりお申し込みください。申し込みの際、お名前(所属がある場合は所属名も)、発表のタイトル、発表の方法として「会場発表」か「オンライン発表」かを明記してください。
- ②発表要旨の提出は2023年2月11日(土)が〆切です。発表要旨はA 4サイズ2枚以内で作成し、タイトル・発表者名を最初に書き、PDFファイルにしたものを提出してください。発表要旨の提出先は、学会のE-mail: mukogawarinkyo@yahoo.co.jp です。PDFファイルを添付してお送りください。
- ③ 発表者には発表後のまとめの提出(字数は1,200字程度。編集の都合上、Microsoft Wordのファイル形式で保存したもの)もお願いしています。 〆切は2023年3月31日(金)とします。 上記宛てに送信ください。

#### ◆ 研究大会参加の方法について

- ① 事前参加申し込み制といたします。2023年2月13日(月)を〆切としますので、〆切日までに下記のフォーム あるいはメールからお申込みください。メールの場合、「会場参加」か「オンライン参加」かを明記してお送りください。
  - Googleフォームによる申し込みはこちら: <a href="https://forms.gle/h71T5ePCEhbsiYzo6">https://forms.gle/h71T5ePCEhbsiYzo6</a>  $\rightarrow$  スマートフォンやタブレットを用いて、右の二次元バーコードを読み取ってもアクセスできます。

- ●メールによる申し込みはこちら: mukogawarinkyo@yahoo.co.jp
- ② 参加申込をいただいた方には、オンラインでの参加方法、発表要旨集録をメールでお送りします。
- ③ 「会場参加」「会場発表」の方は、感染防止のため次の点にご留意ください。
  - 1) 必ずマスク等による飛沫飛散防止をお願いします。
  - 2) 受付では氏名・所属・電話番号の記入をお願いします。また検温をさせていただきます。 (発熱などの症状がある場合は入場をお断りさせていただきます。)
  - 3) 建物入口や会場内にアルコール消毒の場を設けますので、手指の殺菌をお願いします。
  - 4) 会場内での発言は、挙手をした上でマイクを通じてお願いします。
  - 5) 借用している教室以外の場所やフロアーへは立ち入らないでください。

# 小さな学習会の継続を 🤛 🥟 🧼 🥌 🥌 🥌 🧓

第1回理事会・事務局会議の討議で、大会までに小さな学習会を具体化することが決まりました。従 来の3つのグループの学習会の発展という位置づけです。年間の計画としては、12月,4月,6月.9月 いずれも第1土曜日に開催することにしました。年4回の予定です。第1回目として渡邉会長から「臨床 教育学の思想・方法を耕すと題して問題提起がありました。なお、タイトルはすべて仮題です。開催方法 は、オンラインでの開催を基本としています。

福井 雅英 (元武庫川臨床教育学会会長) 4/1(土) 子ども理解のカンファレンスの意義

6/3(土) 当事者の語りを聴くということ 上田 孝俊

9/3(土) 大正時代からの感染症の歴史 吉岡 眞知子

11/4(土) 生活綴方と臨床教育学における子ども理解 田﨑 由子

※理事会の体制として吉岡理事を研究部長とし、上田理事・吉益事務局長で研究部を設立しました。

# 生活綴方、自己の労作、教育実践内史 – 渡邉報告の骨子 💎 🌑







渡邉報告は10月の日本臨床教育学会のシンポジウム提案を基本にして、臨床教育学を教育実践研 究の側から学んできた立場として、「臨床教育学とは何か」という問いを掘り下げることを趣旨とする問題提 起でした。はじめに、①生活綴方教育から学んだ子ども理解の思想、②丹羽徳子の生活綴方実践から学 んだこと、③一人の教師による教育実践の歴史に浸る意味、これらの観点から話されました。次に、臨床教 育学と教育実践研究の意義として、個々人の生活史が交差する教育実践の意味、生活史を紡ぎ、自己 を形づくる意味、当事者の声・物語・生活史を聴く意味について、日本臨床教育学会設立趣意書にそっ て論及されました。最後には、アーサー・クラインマンの『病いの語り 慢性の病いをめぐる臨床人類学』を紹 介しながら、何かを背負って生きる個々の日常を探る、そのなかで聴くべき声を丁寧に聴き、人々の日常的 実践を考えあう意味について触れられました。

新型コロナウイルス感染症によるパンデミックとその長期化の渦中にある今は、「慢性の病い」が社会化し たような状況であり、だからこそ、さまざまな現場で生きる当事者の声を聴き、重ねることが大事だと力説され ました。自身の大学教育実践、子育ての日常や悩みにも触れられ、それらと地続きのものとして臨床教育 学とは何かという問いをさらに深めたいと話を結ばれました。

## 待つことの意味

報告をうけての質疑、討論では、生活綴方教育と臨床教育学についていくつかの角度から意見交流が ありました。その中で、待つということはどういうことなのかが議論になりました。対人援助職が「待つ」という概 念を用いた時、それは何もしないで待つということではなく、何らかの働きかけをするなかで当事者の行動を 待つということではないかということです。丹羽徳子さんの生活綴方実践で子どもが綴方を書く自由、書かな い自由を保障し、子どもが書くまで待つというシーンがありますが、それは丹羽さんが子どもに色々な助言や 教育的なかかわりを持つ中で、子どもの自発的な表現を待つということでした。単に教育の現場だけでなく 福祉・心理の場でも共通したことではないかということです。「臨床教育学と私」というテーマにつながる学習 会でした

# シリーズ:私と臨床教育学(4)

# 人間そのものの中に

田﨑 由子 (大阪綴方の会)

次の文章は、2017年10月に「スッキリミニ①」と題して書かれた小2の男児の日記である。

今日、ジャングルジムで一人ですわっとったら、気もちがおちつきました。/そして、家に帰りました。そして、風が<u>気もちかった</u>です。/なやみがある時はオススメです。気もちがおちつきます。

(註:原文は/で改行されている。)

一見やんちゃな8歳の少年がどんな屈託を抱えているのか。この時は敢えて何も尋ねなかったが、じっくり彼を観察してみようと思った。翌々月に書いた彼の作文には、参加しているサッカー少年団に後から入ってきた友だちがどんどん上手くなるのに自分はちっとも上達しないので、何とか力をつけたくて自主トレに精出していることが綴られていた。誰もいない教室で、「自主トレのことは、ジャングルジムの上で思いついたん?」と尋ねると、彼は照れたように笑った。

子どもたちの文章表現と付き合ってウン十年。日記や作文で彼らが理解できたなどとは口が裂けても言えない。なぜなら、私はそれらの作品を自分の生活経験の枠内でしか読み取れていないから。しかし、一人ひとりの子どもが、それぞれの喜びや悲しみ、希望やどうにもならない苛立ちなどを抱えていることは知っているつもりだ。ならば、傍らにいる教師には何ができるのか?これが一番の難題で、これまでも、よかれと思って働きかけたことが却って子どもを傷つけてしまった苦い体験は数限りなくある。

今回、「私と臨床教育学」について書く機会をいただいたが、「臨床教育学」の「り」も知らないまま大学院に入学して 10 年あまり、私は未だにこの学問を掴めないでいる。それでも、子どもから発せられたことに教師がどう応えていくかについて考え、迷い、実践する過程を可能な限り記録しておき、改めてそれらを検討しながら見えてきた成果や課題を蓄積していく中で、発達の支援という意味が少しは分かってきたようだ。そして、臨床教育学における学びの対象は書物だけではなく、人間そのものの中にあるのだということを、今、改めて実感しつつある。



# 編集後記

新年あけましておめでとうございます。今年もどうぞよろしくお願いします。臨床教育学とは何か、それぞれの「私の臨床教育学」のイメージを作っていきたいと考えています。3月の研究大会、小さな学習会でも、それを反映していきます。今回のニュースレターはそういう意味を込めて作製いたしました。武庫川女子大学大学院臨床教育学研究科の安東先生とも懇談をし、ご助言をいただき、大会構想が確立いたしました。大会で多くの会員の方々とお会いできるのを楽しみにしております。〈文責:吉益〉